

「満洲文学」の一側面

——梁山丁の『緑の谷』を通じて——

李

青

一 「緑の谷」前後

『緑の谷』は一九四三年に「満洲国」の「新京」（現在の長春）で発表された作品である。五十数年前に書かれたもので、日中間の不幸な歲月、新中国の激動の時代を通り抜け、作者とともに、実に数奇な道をたどった。

『緑の谷』の作者梁山丁（一九一四年十二月三十一日）は遼寧省開元県に生まれた。本名は梁夢庚、現名は鄧立。ペンネームには三丁、菁人、氷菲、菁などがある。中学時代から文学創作をはじめ、若い頃からプロレタリア文学の影響を受けている。

代表作に短編小説集『山風』（新京文叢刊行会一九四〇年）、

詩集『季季草』（詩季社、一九四二年）、長編小説『緑の谷』（新京文化社、一九四三年）などがあり、『満洲』ではもっとも作品数の多い作家の一人である。

彼の作品はいずれも日本の植民地支配下の社会の暗黒面や下層社会の人々を主な対象としている。だが、日本の侵略に大胆な批判を盛り込んだ代表作『緑の谷』によって、ついに故郷から追われることになった。

『緑の谷』に登場する五十数年前の「満洲国」のある場所で起こったことを読み直す作業によって、今まで軽視されてきた「満洲文学」の実態を新しい角度からかいま見ることができると考えられる。

日本は一九三一年九月十八日の柳条溝事件から、中国の

東北地方に対する本格的な侵略をはじめた。中国では「九・一八事件」と呼び、日本では「満洲事変」と称する。翌一九三二年に日本は国際社会の反対と中国国内の反発を抑し切つて、傀儡国家「満洲国」を成立させた。清朝のラストエンペラー溥儀を執政として、十四年にわたる植民統治が行われた。

このような情勢の下で、「満洲」文壇はますます複雑な状況を呈していく。田中益三氏は、当時の「満洲」文学についてこう分析している。

「満洲」をめぐる文学状況を見渡してみると、そこには支配——被支配の構造が有形無形の圧力となつて作品じたいを呪縛しているのが分かる。(中略) 植民者の既得権によりかかった日本作家の余裕ある作品創造に対し、被支配の各民族作家の作品はスムーズではなかった。カプルの単位で例をとると、中国文壇へ出て、活躍した蕭軍・蕭紅は抵抗の志においてさまになる。ならば中国東北に留まり続けた呉郎・呉英、三丁・左蒂のカップルが、その志がなかったか、と言え、そうではあるまい。けれども、中国東北作家たちがその地に在る以上、面従腹背の下に生きつづけなければならなかった。容赦のない権力の下で、協力と非

協力の二重規範の前に佇み、そのあげく、ジグザグな前進をしいられたものだろう。^①

梁山丁によると『緑の谷』は一九四二年に構想をはじめた。日本の侵略と人民の反抗を目にして、ずっと前から熟知している狼溝の農民蜂起について書こうとしていた。しかし、文学の創作も「日満」当局の検閲を通過するためには、高い技巧が必要となる。

『緑の谷』は上坎に住む地主林家と下坎に住む貧しい小作人たちを軸にして、展開される。

家を守る地主家の未亡人林淑貞と執事の霍鳳の愛の悲劇、進歩的な若旦那小彪、下坎に住む小作人の于七爺一家の悲惨な境遇、旗を立てて一揆を起こす緑林の英雄——小白龍や大熊掌、非道横暴な悪人、農民たちの土地を脅かす南満鉄道の存在、さまざまな人物と出来事が交錯する中、日本の統治下にある「満洲国」の農村の暗黒面をリアルに描いている。

この小説ははじめに「新京」の『大同報夕刊』に二章を連載した後、日本人翻訳家の大内隆雄によって『哈爾濱日々新聞』に連載された。一九四三年二月に「新京」の文化社から単行本の出版となる運びになった時、突然「満洲国」弘報処から「『緑の谷』には重大な問題があり、出版

停止処分を待つように」との命令をきかされた。多くの友人の奔走と尽力の結果、五月になってようやく一部削除の形で、何とか書店の一角に並べられた。

作者は『緑の谷』の日本語版『序』で主題について「緑は青春、健康、活潑さを象徴し、成熟した喜びを求める意味も含まれている。これが小説の主題である^②」と書いている。しかし、作者は一九八七年『緑の谷』の完全版が出版されるとき、主題についての本意をこう語っている。

もともと、私は緑林の英雄を書くつもりだった。小説は霍鳳が「匪賊」に身を投じるため、山に入る大熊掌を見送る場面からはじまっている。この場面は、私が大熊掌という農民に対する敬意を表したものである。最後は、大熊掌が狼溝に戻り、村人に歓待される場面で、大熊掌のような緑林の英雄が人民に愛されていることを暗示したのである。^③

二 主題をめぐる「匪賊」の描写

まず『緑の谷』の時代背景について言及したい。末尾の一節はこうなっている。「数日たってから、汽車が突然停車した。下坎に泊まっている鉄道労働者が南満站から帰ってきた。『九・一八』事変のニュースを狼溝にもつてきた」。

しかし作者は再版の時、「小説の最後の一節は、単に警察を惑わすためにつけ加えたものであり、故意に小説の描写時間を『九・一八』の以前にした……」^④と真意を吐露している。すなわち『緑の谷』のストーリーとすべての出来事は、『九・一八』事変以後のことだったのである。

「満洲国」建国以来、「日満政府」は治安及び文芸活動の取り締まりを一連の「規則」制定によって強化していった。一九九一年、中華書局から出版された『東北「大討伐」——日本帝国主義侵華檔案資料選編』には、当時の「匪賊」討伐に関する資料が載せられている。

一九四一年に「満洲国」弘報処は「芸文指導要綱」を發表した。その基本精神は「我國芸文ハ建国精神ヲ基調トス。従テ八紘一宇ノ大精神ノ美的顯現トス。而シテ此ノ国土ニ移植サレタル日本芸文ヲ經トシ、原住諸民族固有ノ芸文ヲ緯トシ、世界芸文ノ粹ヲ取入レ織リ成シタル渾然独自ノ芸文タルベキモノトス」としている。また文芸作品に対する八カ条の制限事項もつくられ、その第四条に「建国前後における暗黒面の描写のみを目的とせるもの」と明記している。

ここから、作者が一九四二年に描こうとした緑林の英雄は、作品の中で相当自由を拘束された形にならざるをえな

かった。作者がここで言っている「緑林の英雄」とは、当時「日満政府」が全力を挙げて撲滅しようとしていた「匪賊」のことである。彼ら「匪賊」を正面から描くことはきわめて危険で、ほとんど不可能に近かった。そこで、作者は「緑林の英雄」を表現するために、東北で一般に使われている「胡子」という言葉を借用した。これにより、「匪賊」の代表小白龍や大熊掌の活躍が描かれるとともに、それらを通じて、作者の必死の抵抗姿勢を読み取ることができるのである。

では作品の中の「匪賊」とはいったいどのような者たちなのだろうか。作品のはじめの設定はとても印象深い。地主林家の執事である霍鳳は「胡子」に仲間入りしようとする幼馴染みの大熊掌をひそかに見送る。「彼は山の奥にもぐり込んでいる友人たちのことを思うと、おもわず淋しくなった」。霍鳳の名残惜しさが感じられる。

作者は大熊掌がなぜ家を捨て、幼馴染みと別れ、「胡子」にならざるをえなかったのかははっきりとは語っていない。彼が山から出てきて、霍鳳に林家から馬の調達を頼むとき、大熊掌の人物像についてこう書いている。

話をしている人は声がかすれており、言葉の裏から決断力と意志の堅固さがみてとれる。ちりとりのような

に大きく開いた両手は、短くごつごつした腕と不つり合いにみえる。

梁山丁の初期の作品の中では、「胡子」の描写がよりはっきりしている。例えば、一九三一年に書いた短編小説『山溝』では、「胡子」が去るときに百姓のものを何一つ持っていかず、地主の「老大先生」だけを捕縛していったとある。小作人を搾取して、財産をふやしている「老大先生」のような地主は、梁山丁の『緑の谷』の中にも出てくる。彼らはいずれも「胡子」の襲撃の対象となっている。

ここでは作者が緑林の英雄の義拳をたたえながら、日本人の天下である南満站への批判を暗示している。小白龍を首領とする「匪賊」のことをこう書いている。

小白龍は二カ月にわたり狼溝に蟠踞している。天を覆う蝗のように、地主たちの上を黒く這い回って、舐めたり、吸い取ったりしている。

東囲からの食料の運搬車が切断された。町に馬車の音が不気味にこだまする。その大半は町の中心や南満站に避難する者たちである。騒ぎを恐れているおとなしい資産家や落ち着いたばかりの成金たち……一番惨めなのは貧しい人々である。逃げられなければ、あきらめるしかない。でなければ、仲間入りして、従順に

日々を送るしかなかった。

さらに第六章の中では、小白龍が老馬堡を襲う騒ぎを書いている。

けさ町に運んでいった穀物の馬車は全部小白龍に持っていかれた。馬や馬車も全部とられた。帰ってこれたのは、たった二人の車夫だけだった。

「匪賊」は何も恐れずに地主の穀物を積んだ馬車を略奪したり、村を襲撃したりする。

小白龍の老馬堡への襲撃が目前に迫ってきた。老馬堡の土豪の佟老秀は、村を守ってくれるはずの自衛団に対して、「あてにならない」、匪賊と「通じている」などとあからさまに不信感を漏らしている。

「自衛団はすべてよその村から雇ってきた者だ。」と佟老秀がにこった目をして言った。

「すっからかんの一文無しやごろつき野郎以外、地の元のやつはやるもんか。」(中略)

「自衛団がなければ県の役人は許さんが、おといけば、金で買った弾は全部匪賊のやつらのふところにつちまう。まったく、バカバカしい！」

「すっからかんの一文無し」こそ貧しい小作人たちのことである。彼らが「匪賊」と通じていること自体、雇い主

に対する一種の裏切りであり反抗である。もう少し意味を拡大して解釈すれば、その矛先は南満站——日本の侵略に向けていると考えられる。もちろん、これは作品の中ではあからさまに描写することはできない。しかしながら、南満站に向けた作者の冷たい目から、心の奥深くにしまい込まれた反抗精神を見とることができる。

お正月の南満站の様子を見てみよう。

うす暗い日ざしは積もった雪に吸い取られ、空気はじめじめとして重苦しい。路地から時々太鼓の音やリズムの悪い平和曲が聞こえてくる。ごったがえす人の波は、洪水のように路地から大通りになだれこんでいく。こういった人々の大半は、乞食、すり、ごろつき、失業者と商人である。彼らにはぎやかな人の群の中でも時を過ごし、仕事をする機会を狙っている。家族とともに避難してきた農民は駅に泊まり込んで、田舎から持ってきた餅、炒り粉と漬け物を食べて、我慢しながら故郷が平穏になるのを待っている。春は訪れたが、彼らにとって正月の楽しみは何もない。彼らには正月の息苦しさと身の上の苦悩だけがある。

作者の目に映った南満站は、決して心地よい場所ではない。行き来する列車はあたかも「怪獣」のように町の平和

を破壊している。列車は「この大地で収穫された物産、掘り出された鉱物を何千トン何万トンと持っていく。そのお返しは『親善』、『合作』、『共栄』、『提携』……」。

これは「王道楽土」の裏に隠された略奪を皮肉っぽく描いた表現である。初版本ではこの一節は当然当局の気に触り、ついに読者の目に触れることはなかった。

このような大胆な描写は、最後まで「匪賊」に同情を寄せていることからも見る事ができる。

大熊掌は「匪賊」内部の軋轢に嫌気が差し、故郷へ帰ってきた。この時の描写はいかにも軽快で、心地よい。まるで凱旋した英雄を迎えるようである。

大熊掌は久しぶりに故郷の様子をなつかしそうに眺めている。景色はとても素朴で胸を熱くさせる。

丘の上に立って、遠くから眺めると、夕陽に照らされた家のドアや垣は、はつきりと目に映り、前と少しも変わっていない。

村に堂々と入ってきた大熊掌は村人に避けられないばかりか、暖かく迎えられた。

大熊掌は家路を急ぐ。下炊の畑を通る時、すぐにそこで畑仕事をしている村人に囲まれた。

「おい、大熊掌じゃないか？ 元気かい。」と弁髪

の黄が親しそうにあいさつした。

「いつ、帰ってきたんだ」と疤痢眼兒も口をはさんだ。崔大嫂も親切に「ずいぶんお金もうかったんでしょね。みんな心配してるわよ」と言った。

「おれも村のみんなに会いたくて、帰ってきたんだ」と大熊掌はすっかり村人の中に溶け込み、体中に熱いものを感じた。

村人は長い間消息を断っていた大熊掌の帰還を大いに喜んだ。「匪賊」にもかかわらず、御馳走を出して、彼を歓迎した。「大熊掌は自分の感情を抑えきれず、母親の胸に抱きついた子供のように、村人たちの前で泣きそうになった」のである。

だが、作者は完全に「匪賊」を理想化しているわけではない。「匪賊」が村を襲うたびに、「一番惨めなのは貧しい人々である。逃げられなければ、あきらめるしかない。でなければ、仲間入りして、従順に日々を送るしかない」のだった。

第六章で登場する小白龍率いる「匪賊」が狼溝を襲うことを知るや、下炊のほとんどの小作人が上坎の地主の家に避難した。ここに「匪賊」と小作人たちの矛盾が感じられる。旋風のように襲ってきた「匪賊」は南満站や土豪に打

撃をあたえたほか、農民にも不利益をもたらした。

以下のような分析もある。

「匪賊」が村を襲えば、家は焼かれ、けが人、死者は出る。農民は「匪賊」の襲撃を歓迎しているわけではない。男手を失い、一家の将来にとって足手まといにしかならぬ自己を認識していた貧農の夫婦于七奶が、「匪賊」の襲来を知って、創業の血と汗のしみこんだ生家にとどまり、首をくくって果てる姿からも、「匪賊」と農民の矛盾する側面がうかがわれる。

私は作者が「匪賊」を緑林の英雄のように描く真意は、日本の植民地支配に我慢でなくなった人々が「匪賊」に入る以外に選択肢がないところにあると考える。それは日本の侵略に対する反抗姿勢を表しているのである。

三 「緑の谷」の部分削除処分から見る

「満洲」文壇への弾圧

『緑の谷』は日中戦争の最中に発表された。発表の前年の十二月に布告された「芸文指導要綱」による「満洲」文壇全体への取り締まり、「反満抗日」の疑いのある文芸団体の摘発と解散、左翼作家の摘発……著名な蕭軍と蕭紅は関内に逃亡し、流転する作家活動を余儀なくされた。梁山

丁の友人である金劍嘯は一九三六年四月に『大北画刊』にゴリーキーの写真及びゴリーキー危篤のニュースを掲載したため、六月に逮捕、八月に処刑された。一連の弾圧は「満洲」で文筆活動に従事する作家にとって、心身ともに大きな影響をおよぼしたにちがいない。

事実、梁山丁の「満洲」における創作活動は『緑の谷』をもって、終わる。

最近発見された『満洲国』特高警察秘密報告書^⑥で、梁山丁は『緑の谷』を発表する前から当局にマークされていたことがわかった。上記の資料は、一九八七年十二月に出版された『東北文学研究資料』に于雷訳、李喬校正という中国語翻訳があるが、一九九四年五月、杉野要吉編集の『昭和文学史における「満洲」の問題 第二」^⑦に『満洲国』首都警察の文芸界偵諜活動報告^⑧が日本語原文のまま掲載された。

ここで杉野要吉氏が公表した日本語原文を参考にしながら、特高警察の梁山丁や「満洲」文壇への監視活動を追ってみよう。

「日満」当局は反体制の文筆活動に常に目を光らせていた。一九四三（康德十年）年五月にまとめた「最近ニ於ケル満洲左翼作家ノ描写方向」から当局が左翼作家に最大の

注意をはらつていたことがうかがえる。

満州に於ける左翼文学は、其の誕生の当初に於いて政治上の情勢を顧み、抽象的表面糊塗の形式により出せる爲め、本文學に對志「し」、認識なき他民族に於いては、更に中心意識把握上困難を來せるものであった。

特に大東亜戦争勃發後、政府の反満抗日運動者の檢舉彈圧並対策は、左翼作家「を」して、益々注意心を喚起するに至り、従前に比し愈々抽象的曖昧化する「る」であらう。

梁山丁は一挙手一投足を監視されていたことが随所に見受けられる。例えば、同資料の「満映文芸課員ノ近況ニ關スル件」の中では、梁山丁の行動が詳しく記されている。

「山丁ノ最近ノ動向ニ就テハ、表面消極的行動ヲ辿リツ、アリタルガ、突如十一月廿一日ヨリ全三十日迄デ、病氣ト称シ休暇ヲ取リタルガ、之レガ眞偽ニ就キ調査中ノ処、本名妻ノ詰ル処ニ依レバ、出張又ハ歸郷中ナリ等称シ、休暇理由ニ關シ努メテ秘匿シアル模様ニシテ、曩ニ思想犯李季風ノ逃走セルアリ、更ニ今次文藝課勤務「張栞」ノ檢舉等アリテ、客觀狀勢ノ切迫ヲ見越シ一時難ヲ避ケタルモノト思料サル

このほかに、梁山丁の「問題作」を遂一取り上げ、きめ細かく分析している。

長詩『拓荒者』^⑧を例に見てみよう。

「俺を怒らせるな！

お前は叛逆の畜生だ

お前は祖先の敵だ

お前は俺達の子孫ではない」

老人の声は顫へてゐる

「俺はお前に養つて貰はぬでもよい

葬式を出して貰はぬでもよい

俺は土から生まれて

又土に歸つて行くのだ」

分析

老人の其の子に對する教訓を籍りて民族意識と愛國土の思想を鼓吹する。

弟よ、どうして早く歸つて呉れなかつたのか
一刻も早く俺達に手傳つて呉れ
あの野狐は俺達の葡萄を盗み

十一月十三日

あの山鼠は俺達の倉庫を荒した

俺達の緬羊は狐狼に盗まれ

家畜も全部市場に連れて行かれた

弟よ もう何処へも行つちやいけな

この家業はお前も共に負ふべきだ

分析

『野狐』『山鼠』『豹狼』を以て、日本を象徴する。

即ち日本は満洲の宝蔵を掠奪してゐる。愛國愛土の満洲民衆は何れも躊躇なく起上つて、日本を駆逐し満洲を建直さなければならぬと言つてゐるのである。

『緑の谷』自体を分析した当局の資料は発見されていなが、「匪賊」を借りて、民族の覚醒を象徴させようとしたにちがいない。「民族意識と愛國土の思想を鼓舞」してゐるのである。

『緑の谷』は出版前に削除処分を受けた。問題のある個所は頁単位で本からはずされた。

第八章に鉄道が狼溝まで敷かれることを聞いた農民の憤りを表す場面がある。

「おれはもう畑をやらない！ おれは石炭を堀りに行く、木材を採伐に行く、南満站で苦力になる、おれ

はもう畑をやらない！」と弁髪（べんぱ）の黄が憤慨している。

「おれに何ができるか。え？ 一年中働いても、何も残りやしない！ おれはもう畑をやらない！……」

このような憤りの声を吟味してみよう。

作者自身もこの一節をもし「日満親善」の本質は略奪であり、農民に畑仕事をやめるようにと煽動していること「反満抗日」とレットルを貼られたら、私の運命は想像がつかなかった」と振り返っている。

『緑の谷』によつて、筆禍を招いた梁山丁は半ば自由を失つた。相次ぐ家宅捜査で、友人達も恐れて彼に近寄ることができなくなつた。出入りはすべて当局の監視下に置かれていた。一九四三年九月三十日、左蒂夫人の助けの下で、梁山丁もついに「満洲国」を後にした。

四 『緑の谷』の「満洲文学」における位置づけ

現在、『緑の谷』は中国の近代文学史の中で、東北郷土文学を切り開いた作品であると高く評価されている。しかし、『緑の谷』は政治に翻弄される運命をたどつてきた。

『緑の谷』が日本人大内隆雄に翻訳されたことから、一九五八年に漢奸作品と決めつけられた。作者梁山丁も右派のレットルをはられ、二十年も思想改造を強要された。

『緑の谷』は「満洲国」時代の『明明』（一九三八年九月～一九三九年六月）派と激しい論争の後に生まれたものである。

『明明』に掲載された疑渥の『山丁花』を読んだ梁山丁は「郷土文芸と山丁花」という感想文をよせた。彼はその中で「満洲には郷土文芸が必要だ。郷土文芸は現実的なものであり、『山丁花』は郷土文芸を代表している作品である」と「郷土文芸」を提唱した。

しかし、梁山丁の「郷土文芸」に対して、『明明』派は異なる見解を持ち出し、当時の文壇で激しい論争を繰り広げた。

梁山丁は「郷土文学」をこう定義している。

私はあらゆる現実生活をリアルに暴露する作品、地方的色彩の濃い作品、東北人民を描く作品をすべて郷土文学という^⑪。

梁山丁の主張する「郷土文学」の核心は「現実を描き、暗黒を暴露する」ところにあると思われる。

この姿勢は彼の一連の作品から読みとれる。

短編小説『残缺者』では、一家三人をすべて身体障害者に設定し、「王道楽土の偽満洲国に健全な人がいないことを象徴」させた。また『狭街』では生活に追われ、地方の

苦力に応募した劉大兄夫妻の悲しい運命を描いた。

短編小説集『山風』に収録した『歳春』、『臭霧中』、『銀子の物語』、『山風』、『北極圏』、『織機』、『街』、『壕』、『双生児』（孿生）などの作品も同様に、多様な角度から「満洲国」の下層社会でもがいている人々の姿を生々しく描き出している。梁山丁の創作活動を見渡すと、いずれの作品も現実社会をありのままに表現していることがわかる。現実主義の精神をもって、創作に臨むのが梁山丁の創作における最大の特徴と言える。

中国の研究者は梁山丁の「郷土文学」について、その特徴を以下の三点にまとめている^⑫。

第一に「魯迅の郷土文学の影響を直接受けたばかりでなく、プロレタリア文学の影響も受けている」。第二に「二十年代の郷土文学作家の創作に比べれば、強烈な政治的色彩と鮮明な階級的傾向を表している」。第三に「梁山丁が『郷土文学』創作の道を選択したのは東北が淪陥されたという特殊な環境のもとで、現実主義文学の道を模索した結果である」。

もちろん、日本でも『緑の谷』を代表とする抵抗文学は研究されている。岡田英樹氏は以下のような明快な分析をしている。

(中略) 一方に権力が喧伝する「王道楽土」、「五族協和」、「東亜共栄」の「明」があり、一方に中国人作家が固執する「憂鬱、感傷、嘆息」の「暗」があった。「暗」に固執することそれ自体が抵抗であった(中略)。

侵略者の手になる近代化を否定し、農村の疲弊が必然的に生み出す「匪賊」の抵抗をとらえ、中国人民がよって立つ農村世界に光明を投げかけることで、梁山丁の「郷土文芸」は完成をみせた^⑭。

このように現実社会に目をむけ、不遇な人々の運命、暗い社会の暴露を通じ、社会の不合理を生み出したのは「王道楽土、五族協和」を唱える為政者に他ならないというところにもつていく。梁山丁は言論の自由が制限されていた「満洲」で、現実を暴露する手法で独持の「郷土文学」を創造した。『緑の谷』はまさに「郷土文学」を代表する佳作と言えよう。「満洲国」で生きた中国人作家の抵抗姿勢をあらためて感じる。

註

- ① 田中益三「『日本語化』された『満洲』の作家」(『日中文学シンポジウム近代日本と『満洲』』報告集、一九九三年七月、三九頁)。

② 梁山丁「万年松上葉又青——『緑色の谷』瑣記」(『緑色の谷』春風出版社、一九八七年五月、二二六頁)。

③ 同②、二二六頁。

④ 同②、二二六頁。

⑤ 岡田英樹「『満洲国』の創作環境と創作技巧」(『日中文学シンポジウム近代日本と『満洲』』の発表レジュメ)。

⑥ 岡田英樹「『満洲』の郷土文芸——山丁『緑色の谷』を軸として」(『野草』四四号、一九八九年、二四—二五頁)。

⑦ 杉野要吉「昭和文学史における『満洲』の問題第二」(早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、一九九四年五月、三五七—四三〇頁)。

⑧ 梁山丁「拓荒者」(『青年文化』創刊号、康徳十年八月)。

⑨ 同②、二二九頁。

⑩ 梁山丁「郷土文学と山丁花」(『明明』第五期、一九三七年七月)。

⑪ 梁山丁「関外郷土文学の主張及びその特徴」(『文学信息』第九〇期、一九九二年九月)。

⑫ 同⑩

⑬ 黄万華「梁山丁と彼の『緑色の谷』」(『東北文学研究資料』第五輯、一九八七年十一月、八頁)。

⑭ 同⑤二八頁。